



Title	Wilfred Owenの詩的言語の今日的アクチュアリティをめぐって
Author(s)	霜鳥, 慶邦
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 3-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Wilfred Owen の詩的言語の今日的アクチュアリティをめぐって¹

霜鳥慶邦

ウィルフレド・オーウェンという詩人を知ってる？
—大江健三郎『キルプの軍団』

I. 第一次世界大戦 100 周年—歴史の理解、詩の理解

第一次大戦 100 周年を契機に、イギリスでは、大戦の「真実」をめぐって、アカデミズムの内外で活発な議論が展開している。特に注目を集めたのが、2010 年 5 月から 2014 年 7 月まで Cameron 内閣の教育相を担当した Michael Gove の、2014 年 1 月 2 日付けの *Daily Mail* の記事での発言だ。Gove は、大戦が「言語に絶する悲劇」(‘an unspeakable tragedy’) だったことを認める一方で、「神話」(‘myths’)、「誤解」(‘misunderstanding’)、「誤表象」(‘misrepresentation’) を安易に信じ込むことに対して警鐘を鳴らす。この歪曲的神話の主要因として、戦争の無意味さを悲観的に描く *Oh! What a Lovely War* (舞台 1963、映画 1969)、*The Monocled Mutineer* (1986)、*Blackadder Goes Forth* (1989) の 3 作品を挙げる。そしてこの種の神話を広める学者たちを Gove は、「左翼の学者」(‘Left-wing academics’) と呼んで痛烈に非難する (Gove)。

Gove の発言とほぼ同時期のウェブ上のいくつかの記事の見出しを概観すると、当時の論争の雰囲気浮かび上がってくる。

‘Has poetry distorted our view of World War One?’ (BBC)

‘How historians today are denying the reality of World War One revealed by the Poets’ (*No Glory in War*, 13 Nov. 2013)

‘Poets and the teaching of Great War history’ (*The Times*, 19 Mar. 2014)

‘Reclaiming First World War poets from Michael Gove and the historians who want to debunk them’ (*No Glory in War*, 20 Apr. 2014)

‘Poetry is no way to teach the Great War’ (*The Times*, 14 Mar. 2014)

ざっと見て確認できるのは、歴史理解をめぐる論争に、詩をどう理解すべきかという話題がしばしば同レベルで絡んでくる、という現象だ。詩の解釈が、文学鑑賞というレベルを越えて、歴史理解そのものに関わる重大な問題として扱われているということが分かる。

さらに具体的な論争の声を拾ってみよう。ある学校教師は、学校での大戦教育から除去すべき「神話」の 1 つとして、‘war poets such as Siegfried Sassoon and Wilfred Owen provide a representative response of soldiers to the conflict’ (Blake) という考えを挙げ、Sassoon や Owen をはじめとする一部の詩人によって構築された悲観的戦争イメージを批判する。それとはまったく逆に、ある人物は、戦場を直接体験した Wilfred Owen をはじめとする戦争詩人たちの声こそが、「神話」(‘myth’) —イデオロギー、プロパガンダと言い換えてよいだろう—を払いのけ、戦場の「真実」(‘truth’) を伝えた「真の声」(‘authentic voice’) であると主張する (Edwards)。

これらの具体例が示すように、大戦の記憶において、Wilfred Owen は戦争詩人の中でも最重要人物として存在し続けている。21 世紀の今、Owen の詩を解釈することは、第一次大戦の歴史理解それ自体に関わる、きわめて重要な意味をもっている。数多く存在した戦争詩人の中から、なぜ Owen がこれほど大きな存在になったのか。次章では、その過程について概観する。

II. Wilfred Owen と 20 世紀

第一次大戦に出征した Wilfred Owen は、休戦の 1 週間前に西部戦線に没した。生前に発表さ

¹ 本稿は、大阪大学大学院言語文化研究科レトリック研究会第 106 回例会：2016 年度秋期セッション「戦争詩人 Owen を読む」(2016 年 11 月 4 日)での発表原稿と、拙論「記憶の継承、歴史の教育、詩の功罪—第一次世界大戦 100 周年と戦争詩人」に大幅な加筆修正を施したものである。セッションに誘ってくださった渡辺秀樹・大森文子の両氏に感謝申し上げます。また本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「第一次世界大戦 100 周年のために—現代イギリスにおける大戦の記憶の総合的研究」(課題研究番号:15K02300、2015-18 年度)の助成を受けている。

れた Owen の詩はたった 5 編であり、死の時点では詩人としてそれほど世に知られた存在ではなかった。その後、Siegfried Sassoon、Edith Sitwell、Edmund Blunden らの尽力によって、Owen は死後、特に 1960 年代に高い評価を獲得し、「反戦」詩人²として正典化され、さらに学校教育における必読の詩人となった (Todman 160-72)。

Owen の正典化に大きく貢献した重要な作品の 1 つが、Benjamin Britten の *War Requiem* (1962) だ。この作品は、第二次大戦でドイツによる空爆を受け廃墟と化したコヴェントリー大聖堂の脇に新たに建立された新大聖堂の献堂式のために制作された。この鎮魂歌の最大の特徴は、伝統的なラテン語の典礼文に、第一次大戦の詩人 Wilfred Owen の詩を散りばめ、また曲のスコア冒頭に、Owen の言葉‘My subject is War, and the pity of War. The Poetry is in the pity’³を引用している点である。この作品から読み取れることは、Britten が、Owen の詩を第一次大戦という特定の文脈から脱文脈化し、第二次大戦を含めた普遍的な反戦メッセージとして解釈しているという事実である。同時に、*War Requiem* という壮大な鎮魂歌の中でラテン語の典礼文と融合した結果、Owen の詩が強力な普遍性を獲得したことも事実だろう。

War Requiem の翌年に出版された Owen の詩集の評価を見ると、Owen の正典化・普遍化の様子を明確に確認できる。Philip Larkin は、Owen の描く戦争は、「すべての戦争」(‘all war’)、「すべての苦しみ」(‘all suffering’)、「すべての無駄死に」(‘all waste’) を表現していると述べた (Larkin 162)。別の評者は、「我々の現代的価値観」(‘our present-day view of it’) から見て、戦争に対する Owen の姿勢がいかに「正当」なものであるか (‘righteousness’) を強調した (qtd. in Todman 165)。ここで言う「現代」、つまり 1960 年代といえば、ヴェトナム戦争への反対運動、現実味を増す核戦争の脅威への不安、若者文化の台頭といった現象を特徴とする時代である。このような反戦的・反権威的コンテクストの中で、そして第一次大戦 50 周年という歴史的瞬間との重なりによって、第一次大戦の戦争詩——特に Owen——が再注目・再解釈され、あらゆる戦争の恐怖と悲哀の表象となっていくのである。

Owen の正典性と普遍性を見事に視覚化したものが、1985 年にウェストミンスター寺院に設置された第一次大戦詩人の記念石版だ。この石版は、16 人の代表的な戦争詩人の名前を、Owen の言葉‘My subject is War, and the pity of War. The Poetry is in the pity’がぐるりと囲む構成になっている。まるで複数の詩人が Owen の言葉の強力な円環に封じられ、各詩人の個性が消去され、「戦争=‘pity’」というただ 1 つのモチーフに集約されているかのような構図だ。こうして、もともと第一次大戦の戦争詩人たちの 1 人にすぎなかった Owen は、その後の時代の中で、第一次大戦の戦争詩人全体を代表する存在へと昇華するのである。さらには、詩人 Ted Hughes の発言——‘Owen, when I came to know his poems, grew to represent my father’s experience [...]’ (215)——が示すように、Owen は大戦を体験した世代全体の代弁者となる。Hughes の詩における Owen の多大な影響の様子については、すでに多くの先行研究によって論じられている (Eddins, Pearsall, Kendall)。

さて、その後時代は流れ、世界はさまざまな戦争や紛争やテロを経験しながら現在に至っている。次章では、議論を 21 世紀にまでアップデートし、今日における大戦の記憶と Owen の言語の関係について考察する。

III. Wilfred Owen と 21 世紀

2009 年、第一次大戦で戦場を体験した最後のイギリス人生存者が他界し、イギリスは、「第一次大戦世代」不在の時代へと以降した。その死を追悼して、桂冠詩人 Carol Ann Duffy は、‘Last Post’を発表した。この詩の最大の特徴は、Owen の代表作である‘Dulce et Decorum Est’の引用から始まり、さらに Owen の詩の言語が詩に散りばめられている点である。この詩については、拙論 (「〈第一次世界大戦世代〉不在の時代に」) において論じたのでここで詳述することは控えるが、強調しておきたいのは、「第一次大戦世代」を追悼するための桂冠詩人による詩の冒

² Owen の詩は、実際には戦争に対するアンビヴァレントな感情に満ちており (Fussell 270-309; Cole 160-65; Das, *Touch* 137-72)、「反戦」詩人としての Owen のイメージは、かなりの程度、戦後に構築されたものと言える。

³ 1919 年に出版する予定だった詩集の序文として 1918 年に書かれた文章の一部。

頭に Owen が引用されるという現象から、Owen の詩が、いかに大戦の記憶における権威的な存在として生き続けているか、という事実を確認できる点だ。

2010 年、前桂冠詩人 Andrew Motion は、第一次大戦、第二次大戦からイラク戦争、アフガニスタン戦争までを題材にした詩集 *Laurels and Donkeys* を出版した。この詩集全体の主題について Motion は、‘what Wilfred Owen famously described as “the pity of war”’と述べる (Motion, *Laurels*)。この発言が示唆するのは、前章で確認したウェストミンスター寺院の石版の「戦争の悲哀」の円環が、第一次大戦だけでなく、その後の時代の戦争をもその内部に取り込み拡大し続けている様子である。

ちなみに、上に紹介した Hughes、Motion、Duffy という 3 代にわたる桂冠詩人のすべてが、Owen の影響を強く受けているという事実は注目に値する。特別な地位や名声を得ることなく、若くして戦場に没した Owen であるが、彼の詩的言語の DNA は、イギリス国家を代表する桂冠詩人たちの中に確実に生き続けているのである。

Owen の時代を越えた普遍性は、2013 年出版の *The Cambridge Companion to the Poetry of the First World War* に収録された 3 人の詩人 Michael Longley、Jon Stallworthy (2014 年死去)、Andrew Motion の鼎談にも確認できる。Longley は、‘Owen keeps changing, doesn’t he? There are so many Owens’ と、Owen の可変性と普遍性を指摘する (Longley, Motion and Stallworthy 264)。そもそも Longley 自身が、‘so many Owens’ の中の 1 人であることは明らかだ (Owen の Longley への影響については、たとえば Phillip, Brearton を参照)。そして Longley の発言を受けて、Stallworthy は、Owen の詩がアフガニスタン戦争を含めた「あらゆる戦争」(‘any war’) の表象になり得ると述べる (Longley, Motion and Stallworthy 264)。

上記の内容は、もしかしたら詩人たちの世界内部のやや過剰な Owen 賛美という印象を与えるかもしれない。そこで以下では、詩の領域から離れて、政治・社会・文化・軍事の分野へと射程を拡大し、いくつかの事例を参照していこう。

2010 年、*The Independent* のある記事は、当時首相だった Cameron が、もっとも好きな詩として Owen の ‘Dulce et Decorum Est’ を挙げた、というエピソードを伝えた。記事の著者は、当時進行中の戦争に関わっている国の首相が、戦場の恐怖を生々しく描く Owen の詩を好むという発言は「驚き」(‘surprising’) と思われるかも知れないと述べる一方で、Owen の詩が英米の軍人を含め多くの人々によって好まれているという事実を紹介し、‘Dulce et Decorum Est’ を賛美する首相の発言は、たとえ自己 PR が入っているとしても、本物だろうし、また Owen を称揚する価値観は「主流」(‘mainstream’) であると締めくくる (Ricketts)。

Owen の詩は国家の政治的トップの声とうまく調和するかと思うと、まったく逆に、政府による戦争遂行を非難する反戦の声にとっての強力な武器にもなる。2012 年、イギリスによるイランへの攻撃に反対する集会で、俳優の Roger Loyd Pack (2014 年死去) は、Wilfred Owen の代表作 ‘Strange Meeting’ を朗唱した (‘Strange Meeting’)。100 年も昔の Owen の詩が、現代においても、反戦のための政治的アクチュアリティに満ちた声として生き続けていることを示す印象的な出来事だ。

さらに、実際にイラクやアフガニスタンで戦争を体験した軍人の声を聞いてみよう。一例として、2006 年 2 月 1 日付けの *The Guardian* の記事を見てみよう。記事の見出しは ‘No one better captured the pity of war, says British army chief’。この比較級の後には、もちろん ‘than Owen’ が省略されている。‘the pity of war’ というフレーズは Owen による言葉であることを考えれば、「Owen ほど戦争の悲哀を見事にとらえた者はいない」というこの記事の見出しは、完全なトートロジーである。まるで「戦争=‘pity’」という普遍的・絶対的真理がア priori に存在し、それをうまく言語化したのが Owen である、という印象を与える見出しである。記事は Owen と現代戦争との関係について次のように記す。

In the preface to his War Poems, Wilfred Owen wrote: ‘Above all, I am not concerned with Poetry. My subject is War, and the pity of War.’ He could not have known that, 90 years later, his verse would resonate with his successors in the uniform of the British army and their own sense of remembrance.

General Sir Richard Dannatt, the Chief of the General Staff, is among serving soldiers who have revealed how First World War poetry speaks to them across the century as they face the horrors of war in Afghanistan and Iraq.

Dannatt, who caused a political storm last month by suggesting that British troops should be brought home 'soon' from Iraq and that their presence was 'exacerbating' tensions, says Owen's work still has a powerful immediacy. (Smith)

この引用で注目したいのは、最後の一文の「a powerful immediacy」というフレーズだ。「直接性」とも「無媒介性」とも訳される「immediacy」という語は、兵士の戦場体験と言語表象について、次のことを示唆している。この記事のタイトルが暗示するように「戦争＝'pity'」という Owen 的モチーフが普遍的真理と化し、そのパラダイムの内部で兵士たちが自身の戦場体験を認識し言語化しようとするとき、Owen の詩の言語以上にそれを「直接的」に「無媒介的」に表象し得る手段があるだろうか。換言すれば、戦場の兵士たちは、筆舌に尽くしがたい自身の戦場体験を、Owen の言語を「媒介」し「反復」することによってのみ、「無媒介的」に「直接的に」言語化し得るといふ、逆説的な現象が浮かび上がってくるのである。

同様の現象は、別の戦場体験者の発言にも確認できる。2011年に、*Heroes: 100 Poems from the New Generation of War Poets* というタイトルの詩集が出版された。これは、現代の戦争を体験した一般の兵士やその家族たちから詩を公募し審査し編纂したものである。作品掲載者の一人（アフガニスタン戦争に参加した元兵士）は、*The Independent* の記事の中で次のように述べる。

Wilfred Owen and Siegfried Sassoon, among others, encapsulated the horrors of the First World War so viscerally: their poetry is insurmountable.

Owen's statement—'My subject is War, and the pity of War. The Poetry is in the pity'—is well known, but another line, in the same preface to his collection *Poems* (1920), is: 'This book is not about heroes. English Poetry is not yet fit to speak of them.'

How, if that was the situation after the First World War, could it be any different with Iraq and Afghanistan? (Jeffrey)

この発言のポイントをとらえるには、1行目の「encapsulate」という単語を、あえていったん字義的に理解するとよいだろう。つまり Owen と Sassoon によって、戦争の恐怖に関するあらゆる語彙が、戦争詩という「カプセル」の中に高密度に密閉された。そして鮮度を失わないその言語カプセルは、その後のさまざまな戦争の言語表象において、「a powerful immediacy」に満ちた存在として効力を発揮し続けている、ということだ。この引用の最後に見られるように、イラク戦争とアフガニスタン戦争に、100年も昔の第一次大戦が容易に並置可能なのは、これらの戦争が、時空間的距離とは別に、言語表象の次元において、第一次大戦の戦争詩と同一の言語パラダイムの内部に存在しているからに他ならない。

Heroes の1年後の2012年に出版されたある詩集は、Owen を中心とする第一次大戦の戦争詩の意外なほどの普遍性を物語っている。詩集のタイトルは、*Poetry of the Taliban*。これは、タリバン兵たちの詩をパシュトゥー語から英訳した詩集で、当然、出版をめぐる物議を醸した（Borger）。イギリスにおけるこの詩集の受容と解釈を考察するうえで興味深いのは、カバーに掲載されているいくつかのレビュー文だ。あるレビュー文は次のように述べる——'Indeed, as enemies' triumphs and ruination in their mountain homeland tests these mujahedeen's faith in God, some even echo the shock, sense of betrayal and despair of Britain's First World War poets' (Linschoten and Kuehn)。このレビュー文は、タリバン兵たちの戦場体験を、何の脈絡もなしに、唐突に第一次大戦の戦争詩人たちに関連づける。なぜこのような唐突な接続が可能なのか？ この短い断片的な文章からその手がかりを得ることは不可能だが、逆に言えば、脈絡の不在という現象それ自体が、次の事実を物語っている。それは、第一次大戦の戦争詩に、そもそも脈絡は不要であるということ、つまり戦争詩の言語は、特定の文脈を越えた普遍的パラダイムと化しており、それは、現代のタリバン兵にすら適用可能であるという事実だ⁴。

もう1つのレビュー文を見てみよう——'This extraordinary collection is remarkable as a literary project—uncovering a seam of war poetry few will know ever existed, and presenting to us for the first

⁴ Paul Fussell の次の言葉は、第一次大戦の脱文脈的特徴を明確に言い表している——'[T]hat war detaches itself from its normal location in chronology and its accepted set of causes and effects to become Great in another sense—all-encompassing, all-pervading, both internal and external at once, the essential condition of consciousness in the twentieth century' (348).

time the black-turbanned Wilfred Owens of Wardak' (Linschoten and Kuehn). タリバンの詩人たちを、「ヴァルダク [アフガニスタンの地域] の黒ターバンを巻いた Wilfred Owen たち」と表現する。本章の前半で、'Owen keeps changing', 'There are so many Owens' という Longley の発言を紹介したが、Owen は、第一次大戦のイギリス兵の象徴的存在であるだけでなく、時代・民族・宗教を越えて、タリバン兵の記号にすらなり得るといふ、Owen の驚くべき可変性と普遍性を表す発言である。

最後に紹介したいのが、インドの詩人 Akhil Katyal が、大戦 100 周年の 2014 年に合わせて、第一次大戦でのインド人兵士たちを追悼するために発表した詩 'Some Letters of Indian Soldiers at World War One' だ。「インド人兵士たちがヨーロッパの塹壕から故郷に宛てて書いた、歴史的価値に富むと同時に胸を突き刺すような」書簡を読み通したうえで書かれたこの詩は ('Interview'), 兵士たちの書簡からの引用を散りばめながら——'Only the broken limbed can go back' (1); 'no man can return to the Punjab whole' (2); 'I am like a soap bubble and have no hope of life' (5); '... in one hour 10,000 are killed. What more can I write?' (11)——、最終スタンザの次のフレーズへと至る——'bravery is the oldest lie on the rack, / pulled out in bloody times' (16-17).

この一節が Owen の 'Dulce et Decorum Est' に基づいていることは言うまでもない。ガス兵器攻撃に苦しみながら死にゆく戦友の姿を描くこの詩の締めくくりは、あまりにも有名だ——'The old Lie: Dulce et decorum est / Pro patria mori' (28-29). 祖国のために命を犠牲にすることの尊さと美しさを称える Horace の言葉を 'The old Lie' と否定し、戦争のナショナリズム的プロパガンダを痛烈に批判する Owen と同様に、Katyal は、戦場で負傷し死にゆくインド人兵士たちの声を復元し、戦場の兵士の「勇敢さ」のみを強調する戦争イメージを 'the oldest lie' と呼んで脱神秘化するのである。

前章で、多くの第一次大戦詩人の中の 1 人に過ぎなかった Owen が、第一次大戦詩人全体を代表・象徴する存在へと昇華する様子を確認した。その後 Owen はさらに普遍化し多様化し、時代・民族・宗教をいともたやすく超越しながら、すべての戦争のすべての兵士の強力な言語表象パラダイムとして、21 世紀の今も確実に存在し続けているのである。

IV. おわりに

以上、Wilfred Owen の正典化と普遍化の過程を概観してきた。これまでの議論を踏まえて明らかになるのは、Owen の詩を読むという行為は、決して現代とは無関係の 100 年前の文学作品を鑑賞するという懐古的で趣味的な行為ではないということだ。Owen の詩的言語は、時代を越えて今の時代にも確実に生き続け、文学のみならず、文化・社会・政治・軍事といった様々な分野に多大な影響を及ぼし、現代人の戦争認識・表象と深く関わっている、きわめて強力な今日的アクチュアリティに満ちた言語なのだ。歴史の中で拡大し続けてきた Owen の「戦争の悲哀」の円環は、かなりの程度において現代人をもその内部に取り込んでいる。だとすれば、Owen の詩のレトリックを分析する行為は、必然的に、現代の我々自身の戦争認識・表象を構造化する輪郭＝円環を可視化するための自己再帰的行為になるはずだ。この点にこそ、大戦 100 周年の今、Owen の詩を読む意義がある。

参考文献

- Blake John. 'The first casualty: truth'. *TES*. 8 Nov. 2013. Web. 20 Nov. 2014.
- Borger, Julian. 'Taliban poetry book denounced by former British commander'. *The Guardian*. 4 May 2012. Web. 19 Nov. 2014.
- Brearton, Fran. *The Great War in Irish Poetry: W. B. Yeats to Michael Longley*. 2000. Oxford: Oxford UP, 2003. Print.
- Britten, Benjamin. *War Requiem*. Rec. 1963. Decca, 2006. CD.
- Cole, Sarah. *Modernism, Male Friendship, and the First World War*. Cambridge: Cambridge UP, 2003. Print.
- Das, Santanu. *Touch and Intimacy in First World War Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 2005. Print.
- Duffy, Carol Ann. 'Last Post'. 'Poems for the Last of WWI'. *BBC Radio 4 Today*. 6 August 2009. Web. 9 June 2010.

- Eddins, Dwight. 'The Iniquities of the Fathers: Ted Hughes and the Great War'. *World War I and the Cultures of Modernity*. Ed. Douglas Mackaman and Michael Mays. Jackson: UP of Mississippi, 2000. 135-150. Print.
- Edwards, Katherine. 'Reclaiming First World War poets from Michael Gove and the historians who want to debunk them'. *No Glory in War*. 20 Apr. 2014. Web. 21 Apr. 2014. [Source: Edwards, Katherine. 'In Defense of the War Poets'. *LeftCentral*. 5 Jan 2014. Web. 21 Apr. 2014.]
- Faulkner, Neil. 'How historians today are denying the reality of World War One revealed by the poets'. *No Glory in War*. 13 Nov. 2013. Web. 12 Nov 2014.
- Fussell, Paul. *The Great War and Modern Memory*. 1975. New York: Oxford UP, 2013. Print.
- Gove, Michael. 'Why does the Left insist on belittling true British heroes?'. *Mail Online*. 2 Jan. 2014. Web. 2 Dec. 2014.
- Hughes, Ted. 'Postscript I: Douglas and Owen' (Letter to the Editor). 1988. *Winter Pollen: Occasional Prose*. Ed. William Scammell. 1994. London: Faber and Faber, 1995. 215-17. Print.
- 'Interview with Poet Akhil Katyal'. *Culture Stories*. Web. 21 Dec. 2016.
- Jarman, Derek. *War Requiem*. 1988. Uplink, 1989. DVD.
- Jeffcock, John, ed. *Heroes: 100 Poems from the New Generation of War Poets*. London: Ebury P, 2011. Print.
- Jeffrey, James. 'The poetry is in the pity'. *The Independent*. 28 Oct. 2011. Web. 19 Nov. 2014.
- Katyal, Akhil. 'Some Letters of Indian Soldiers at World War One'. *Akhil Katyal Poetry*. 21 Feb. 2014. Web. 21 Dec. 2016.
- Kendall, Tim. *Modern English War Poetry*. 2006. Oxford: Oxford UP, 2009. Print.
- Larkin, Philip. 'The War Poet'. 1963. *Required Writing: Miscellaneous Pieces, 1955-1982*. 1983. The U of Michigan P, 1999. 159-63. Print.
- Linschoten, Alex Strick and Felix Kuehn, eds. *Poetry of the Taliban*. Trans. Mirwais Rahmany and Hamid Stanikzai. London: Hurst. 2012. Print.
- Longley, Michael, Andrew Motion and Jon Stallworthy. Ed. Santanu Das. 'War Poetry: A Conversation'. *The Cambridge Companion to the Poetry of the First World War*. Ed. Santanu Das. Cambridge: Cambridge UP, 2013. 257-67. Print.
- McMillan, Ian. 'Has poetry distorted our view of World War One?'. *BBC iWonder*. Web. 9 June 2014.
- Motion, Andrew. *Laurels and Donkeys*. Thame: Clutag P, 2010. Print.
- Owen, Wilfred. 'Dulce Et Decourm Est'. *The Penguin Book of First World War Poetry*. 2nd ed. Ed. Jon Silkin. London: Penguin, 1996. 192-93. Print.
- Peasall, Cornelia D. J. 'The War Remains of Keith Douglas and Ted Hughes'. *The Oxford Handbook of British and Irish War Poetry*. Ed. Tim Kendall. Oxford: Oxford UP, 2007. 524-41. Print.
- Phillips, Terry. *Irish Literature and the First World War*. Oxford: Peter Lang, 2015. Print.
- 'Poets and the teaching of Great War history'. *The Times*. 19 Mar. 2014. Web. 10 June 2014.
- Ricketts, Harry. 'The power of war poetry, from the Western Front to Helmand province'. *The Independent*. 3 Oct. 2010. Web. 17 Jul. 2011.
- Smith, David. 'No one better captured the pity of war, says British army chief'. *The Guardian*. 12 Nov. 2006. Web. 1 Feb. 2014.
- 'Strange Meeting at Don't Attack Iran Campaign Launch -- Roger Lloyd Pack'. *Stop the War Coalition*. 6 Feb. 2012. Web. 5 May 2012.
- Todman, Dan. *The Great War: Myth and Memory*. New York: Hambleton Continuum, 2005. Print.
- Williams, Dave. 'Poetry is no way to teach the Great War'. *The Times*. 14 Mar. 2014. Web. 10 June 2014.
- 大江健三郎. 『キルプの軍団』. 岩波書店. 1988年. Print.
- 霜鳥慶邦. 「記憶の継承、歴史の教育、詩の功罪—第一次世界大戦 100 周年と戦争詩人」. 『ポストコロニアル・フォーメーションズ X』. 大阪大学大学院言語文化研究科. 2015 年 6 月. 17-26. Print.
- 「〈第一次世界大戦世代〉不在の時代に——Carol Ann Duffy, 'Last Post' と傷の記憶／記憶の傷」. 『英文学研究』第 90 卷. 日本英文学会. 2013 年 12 月. 1-18. Print.